

六年半という年月は、ある意味では大変長い。高校三年の小娘がいつしか大学を卒業し、高校一年に入学生したばかりの子供が大学の三年生になり、それぞれいつしか大人並みの言動をしている。同じ年月のめぐりの上にある私も又老境に入り込んだのは当然である。

それにしても、五十代で送迎する一年は短く儂い。十代、二十代の一年に比すれば一月分にも足りないものである。光陰矢の如しという実感と、往きて再び還らじ、という切なさが身にしみる。一日一日を大切に。有意義に暮すということの重大さを感じる。

九州の真中で育ち、東京に学んで東京に暮したいという青春の夢は、三菱電機に入社した私の運命によって破られた。入社時から十数年の若い日夜を長崎で送り、挙句の果ては原爆で一切を砕かれ去った私である。いわば戦時中の死生観の狂いか正しさかは問わぬが私の中にある使命感は、工場と会社の再建に命を賭するという道を直進させた。労使の激流の渦巻きの中に戦後の二十年を送った。四海ようやくと太平と繁栄のムードが漲る頃、勤労の中核から離れて、私は上州の地に赴いた。家電品の逆巻く濁流ようやくと兆しかけていた頃、知る由もない無知の盲勇で私は胸を張って乗り込んだ。

おこがましい限りであった、ともいえる。おろかな単純さだった、とも思える。自分だけの生活の計算は私はいやである。

幸にして、馬電の全従業員は頑張ってくれた。予想以上に諸君は元気ではつらつとしていた。諸困難によく耐え抜いてくれた。クリ

ナー界を風神の旋風で押しまくり、温水器の台頭とそのブームの潮流に棹さしては、国内随一の主導権を確立した。家電界の好調の波に乗って、当所の基準商品のあれこれもようやく一陽来春の朝を迎え、米国の市場進出までも具現した。馬電の軌道はほほほほ上り栄ある十周年も盛大に迎えることができた。

思えば千五百名余の全従業員十年に余る労苦の花が咲いたのである。堅忍不拔の努力の結実であった。本当に有難う。ご苦労さまでした。

しかし、今日の世波の推移は激しく速い。国際国内の嵐は果しなく舞い狂う。家電界を襲う嵐の行方も又、洵に混沌としてしかも凄まじい限りである。切角、安定したかに見えた当所の前途も、手放しの安心や樂觀は許されぬ現実状である。新しい分野の開拓、未踏の領域の進出を志向することは、不断の心構えであるが、現在はかなりの緊要さでそれを迫られる

ている。

過去のもの、在来の軌道の上で安座してはならない、停止するということはお倒れることを意味する。常に前進しなければならぬ。いつも、基本的には前向きでなければならぬ。

此の重大な秋、私は当所に別れを告げることには一抹の未練が残る。もう一步高めさらに拡大された基盤の上で手を振りながら去りたい、と念じていた。残念である。

しかし、私は固く信じている。馬電は若い。まだまだ伸びる。限りなく豊かな未来がある、と。その未来への伸展力の主体は、従業員の皆さんである。全従業員の一人一人が、より一層、元気に、ひたむきに、たくましく頑張り抜いてゆく限り、どんな困難が来ようと、いかなる苦しみが重なるうと、乗り越え、叩き潰して進んで行けるはずである。

たとえば、此の半年余りの間に猛然と盛り上ってきたZD運動のすばらしい成長ぶりのように、全職場の隅々にまで積極的な誠実な根性と迫力が漲るなら、馬電の将来に何の心配もあるまい。

新しい若々しい幹部や指導者を中心にして、一糸乱れぬ今後の皆さんの行進を、私は無上のいわば懸命の愛と祈りを込めていつまでもどこからでも見守ってゆく。

皆さんと馬電の果しない成長を、衷心から念じ続けてゆく。

六年半、親しみ睦しみ合ったこの土地、あの山、あの川、そしてこの人々、それぞれに別離の情の耐え難いものがある。

私には、三つの故郷がある。第一は生まれ育った九州は肥後の山河であり、第二は人生第一歩の若き十年余りを送迎した長崎の地であり、第三は稔り多かるべきこの六年余を過ぎた上州の山河風土である。

それぞれの故山が私を励まし、崩れ折れようと私の身心を慰め、支えてくれた。

将来も変りはないと信ずる。夢に生き、おそらくはその追求のまま消えてゆくであろう私の人生の殆んど最終の段階で、めぐり会うことができた群馬の山河と人情である。私にとつて、おそらくは、最後の愛情を捧げつづいた故郷である、上州よ！馬電よ！そして全従業員の皆さんよ！くれぐれもお元気で、とこしえに健在であれ。さようなら。

昭和四十五年十二月一日

